

低炭素社会戦略センターシンポジウム

「低炭素技術をどう社会につなげてゆくか」

日時 平成 26 年 12 月 15 日（月）13:30～17:00

場所 伊藤謝恩ホール

閉会挨拶

**中村 道治（独立行政法人科学技術振興機構（JST）理事長）**

本日は LCS のシンポジウムにご参加いただきまして、ありがとうございます。JST では、いろいろな研究開発、ならびに LCS のようなシンクタンク的な検討など、幅広く取り組んでおります。言うまでもなく、エネルギー環境問題は地球社会の将来にとって非常に重要だと思っています。これからも力を入れてまいります。

先の 12 月 10 日に、ストックホルムで、発光ダイオードを発明された先生方に対するノーベル賞の授賞式ならびに晩餐会に出させていただきます。わが国の科学技術のすごさ、社会ならびに学術分野に多大な貢献をしていることにあらためて感銘を受け、関係者に敬意を表したいと思います。

今日の話題になっているような「技術と社会をどのように結び付けるか」は、エネルギー・環境に限らず、いろいろな分野で重要なことです。最近、ヨーロッパでは、これに対して「サイエンス 2.0」というカッコいい言葉を使います。つまり、科学者や技術者が自分たちの頭で考えてどんどん進めていって、「こんな良いものができたから、さあ世の中の人、使ってください」という時代はもう終わったということで、企画するところから、最終的に社会に実装して、その後それをずっとメンテナンスしていくところまでを含めて、シチズンサイエンスというか、社会・市民と一緒に、あるいは政治・産業など、いろいろな分野の方と一緒にやっていくという時代になりました。

ちなみに、「サイエンス 2.0」の中には、今日、江崎先生や皆さん方からお話があったように、情報通信の力をふんだんに使う、あるいはビッグデータを使うということも含まれています。しかし、日本人はどうも一言で表すコンセプト的な言葉をつくるのが苦手ですが、今日のお話を伺っていると、実際の研究現場で、あるいは社会で、どんどん進んでいるということを実感しました。われわれはその点でもまだ優位にあるのではないかと考えています。楽しみにしたいと思います。

それから、最後に議論になったことに私も全く共感します。今度、JST もインドに小さなブランチオフィスをつくらうと思っていますが、行った者の報告を聞くと德里は北京よりも PM2.5 がひどいようです。そういうことを考えると、日本の中で、どんどん優れたシステムやサービスをつくっていくことと同時並行で、世界に貢献する、あるいは世界にシステムやインフラを輸出することを国としてはやっつけていかなければならず、そのことが非常に感謝されるのではないかと、私も個人的に感じています。そういう形で日本が持続可能社会の実現に貢献できればと思います。

LCS は、こういう形で将来の技術評価ならびに社会シナリオの構築をメインにしますが、皆さま方と一緒に議論していく、一緒につくり上げていくためのプラットフォームとしても貢献したいと思っておりますので、これからは何かありましたら声を掛けていただきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

以上